

在宅要介護者には一人暮らしや老々介護が多い

諏訪広域連合が在宅で暮らす要介護認定者を対象に23年の1月実施した実態調査によると、心身が衰え要介護になっても一人暮らしをしている方が20%もいました。二人で暮らす世帯は約29%ですが、一人が要介護で一人は介護者、その多くは老夫婦による老々介護とされます。在宅の要介護者の約半数が一人暮らしや老々介護ということは大変な事です。一人暮らしで30分以内に駆けつけてくれる子どもがいる方が41%いる反面、駆けつけてくれる親族がいない方が21%もいます。ご近所など地域の支え合いや見守りが求められるゆえんです。

要介護になっても多くの方が住み慣れた地域や自宅での暮らしを望んでいますが、重度になると在宅の暮らしが困難になります。とりわけ一人暮らしの場合はぬきさしならぬ状況になりますが、調査によると困難になったら子どもや親族の所に同居すると答えた方はわずか12%で、施設や共同住宅と答えた方が43%と約3.5倍になります。一旦別居した高齢者の場合、家族介護に戻ることの困難さが伺え、晩年の安心のより所として不足している介護入所施設の整備が急務です。

